

1997年11月19日

## 資料室だより 28

Recent Researches in the music of the Renaissance (A-R Edition) のシリーズ 74~76 巻に所収されているル・ジュヌ Claude Le Jeune ((ca1530-1600) の "Dodecacorde" (Ed by A.H.Heider) を購入しました。フランス語の美しさを大切に、フランス音楽の粋のような作品を残し、現代作曲家のオリヴィエ・メシアンにまで靈感を与えている作曲家。代表作である "Le Printemps" (春) のようなメトリカル・シャンソンのイメージが強いのですが、彼はパリを拠点としつつもプロテスタント教徒、つまりカルヴァン派のユグノーでした。このドデカコルドというのは「12の旋法ごとに書かれた12のダビデ詩編曲集」ということです。

神を賛美するのに人間が勝手に作った言葉を用いてはならないというカルヴァンの厳しい考えにより、クレマン・マロやテオドール・ド・ベーズといった詩人たちが詩編を自国語のフランス語に、しかも歌いやすく韻文化し、言葉と音楽の一致を試みたのがいわゆるジュネーブ詩編と言われるものです。これにプロテスタントの作曲家、ルイ・ブルジョワらが音楽を付けていきます。母国語による賛美ということへの歴史に残る真摯な一例ではないでしょうか。当時の一流の詩人と一流の音楽家が、これまた第一流の宗教者と共同したからこそその産物と言えます。これを源としてクロード・グディメルやル・ジュヌといった作曲家がモテット様式で作曲していったわけです。またカトリックの作曲家であるピエール・セルトン、クレマン・ジャヌカン、ジャック・アルカデルトなどもこのジュネーブ詩編によって作曲を試みています。ル・ジュヌは実にこのドデカコルドを自分の作品の中で最も重要な業績とみなしています。詩編 102 などは 16 の分部からなる大曲で、それ以外にも 10 部分以上を持つ曲はたくさんありますが、どの部分も必ず定旋律にジュネーブ詩編の旋律が使われ実に多様なカントゥス・フィルムスの労作の実例を見ることができるのです。

このたび購入したこの A-R Edition はドデカコルド全曲を取めた唯一の学問的エディションであろうと思われます。

またル・ジュヌはフランス語訳詩編全編に作曲された "Les 150 Pseaumes de David" という作品もあり同じシリーズの 19 巻にありますのでこれも一緒に購入しました。これはカルヴァン派の教会で実際に歌われるために書かれたとされており、以後、ヨーロッパ各地で無数に再版されていくのです。

杉本ゆり 記